

生態系情報とリンクした生物多様性データベースの作成

日浦 勉（北海道大学・苫小牧研究林）

環境省モニタリングサイト 1000 では日本各地の各種生態系で同一プロトコルによって生物多様性のモニタリングを開始した。本データベースは、このプロジェクトおよび日本長期生態学研究ネットワーク (JaLTER) のアクティビティと連携したものである。北海道・北大雨竜研究林から沖縄・琉大演習林までの全国 32 の森林サイトで同一プロトコルに従って採取されている、分解系食物網のなかで捕食者が多くを占める地表徘徊性昆虫の一般標本（2005 年から季節ごとに毎年採取、年間採取標本数約 5,000、これまで約 16,000 標本、今後も数十年継続予定）を中心に、森林生態系だけでなく沿岸や草地生態系も含む JaLTER のサイトで今後採取される他の生物標本も対象とする予定である。このデータベースは生物が採取された場所の物理環境や生態系構造など生息環境情報と直結させることと、長期的な経年変化も併せて時空間的に大きなスケールで生物多様性と生態系機能を同時に解析できることに大きな特徴がある。

GBIF に準拠した形式で作成したデータを JaLTER データベースにも登録することにより、データの属性を特に加工することなく共用することが可能となる。また、標本データベースの方に対応する URL を付けておけば、JaLTER データベースの中の該当データに直接アクセスできる。なお、環境省モニタリングサイト 1000 の森林分野、沿岸分野で採集された標本およびデータベースについても、環境省生物多様性センターに保管されている標本のデータベースのメタファイルを本データベースおよび JaLTER データベースにも保管することにより、異なる事業で得られた標本データの比較解析を容易に行えるようにする。本データベースは、生物標本データと、その標本が採取された地点の生態系情報から構成される。生物標本データの記載項目は DarwinCore2 に準じて定義するので、GBIF システムを通して利用が可能である。生態系情報の部分は GBIF のシステムになじまないが、生態系情報を JaLTER データベースに格納し、生物標本データに JaLTER データベースへの URL を記述することにより、生物標本データと、その標本に関連する生態系情報を併せて利用することを可能にする。

